軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート 56

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

“北京装蹄技術研修を終えて”パートⅡ

前回に引き続き、昨年９月24日～27日に開催された公益社団法人ジャパン・スタッドブック・インターナショナル（JAIRS）主催の「装蹄技術現地研修」の内容を紹介します。

今回は前回紹介した「意見交換会」の後半部分続きから紹介します。

（３）中国馬業協会サラブレッド登記委員会代表者の談話（韓国才主席）

現在の北京には数百の馬術クラブがありますが、装蹄師と呼べる人は20名ほどしかいないという状況にあるので、装蹄師の人材育成は大きな課題であるといえます。今回のような装蹄技術の研修を開催していただいたことは非常に時宜を得たものといえます。当協会からも数名が参加させていただきましたが、非常に啓発されたようです。

現在の中国では、装蹄師は仕事をすればするだけ収入が増加するので、多い人は毎日８頭～９頭の馬の装蹄を行っています。装蹄師の中には１日10数頭の装蹄をこなすという人もいるようです。今後、装蹄師の人材育成を計画的に進めていく必要があり、サラブレッドの飼養頭数が３万頭になった時に、何人の装蹄師が必要となるかということを考えておかなければなりません。ただし、現状では装蹄や削蹄もしない馬が相当数いるということも事実です。

５．おわりに

- 午前の講義用スライドの作成に当たっては、参加者の装蹄に関する知識レベルが分からず、色々と悩みましたが、まずは基本的知識について説明することにしました。午後の実演では当初、現地に火炉（蹄鉄を焼く炉）があるので、造鉄や装蹄実演の後、参加者への技術指導という計画でした。確認したところ現地に火炉はなく、なお上海アップルからの借用工具には限りがあることから、参加者には各自装蹄工具を持参するよう周知してあるとのことでした。現地入りの前には、彼らがどんな工具を使い、どんな工具が揃っているのか、また参加する装蹄師たちがどの程度の技術レベルなのか等々、大いなる興味とわずかな不安を抱えての北京入りでした。
- 研修会の当日を迎え、会場に入ると、30名ほどの参加者が参集し、この研修への現地の期待度の高さが窺われました。今回は蹄を削る鎌型蹄刀と前垂れのみを持参し、他の工具は現地で借用して対応しようと考えていましたが、上海アップルからの数点の借用品を除き、本牧場（中牧集団）側が用意した工具はいずれも手入れが不足し、錆び付いたものや一部破損したものもあり、日頃使用している形跡は窺えませんでした。このような工具類の管理状況を見ても、現地の人たちの装蹄についての注目度や意識はまだまだ不十分であることが分かります。実際に本牧場では、馬取扱者兼、乗り役兼、装蹄師というように１人数役の牧場業務をこなしているようで、装削蹄も片手間で対応し、それも蹄鉄を装着するというよりも削蹄が主体の作業に終始しているようでした。
- 実演では、筆者が日本独自の鎌型蹄刀を使って削蹄した後、４名の装蹄師がフーフナイフを使って削蹄を行いましたが、端蹄廻し（削蹄後に蹄負面の角を鑢で削って、蹄壁欠損を防ぐ）の方法やその傾斜角度が日本の端蹄廻しとは異なっていました。聞くところによると装蹄技術にやや習熟した一部の参加者はオーストラリアで装蹄技術研修を受けたとのことでしたが、参加者の大多数は装蹄を専業としているようには思えませんでした。
- 今回の研修を経験しただけで判断することはできませんが、いずれにせよ現地の装蹄事情はまだまだ未成熟であり、今後はさらに現地の装蹄師の技術レベルや乗馬クラブの事情を調査把握し、より効果的で専門的な研修のあり方を模索する必要があると感じました。

なお、現地の装蹄技術のレベルと反比例して、現地の馬関係者の装蹄技術向上への期待の高さと、そこに向けての取り組みの熱意には頭が下がったことも事実であり、末尾ながら、それら現地でお世話になった方々とJAIRSの担当者各位に心から感謝します。

研修会参加者との記念撮影